

平成 29 年 2 月 17 日

南 の 風 2 2 2

南部ミニバスケットボール連盟

会 長 藤 原 敬 一

221号の続きです。

富士通は1-1-2-1から2-2-1のゾーンを敷く。何とか相手のオフェンスを混乱させようとする意図が伺える。そして、山本がスクリーンからポップしてパスに合わせ、ドライブショットを決める。山本の連続得点である。直後のディフェンスが不可解であった。ゾーンを続けるのか、マンツーマンでいくのかが徹底していなかった。トレイルしてきた渡嘉敷が完全ノーマークとなってしまう。残念な失点であった。ここで渡嘉敷がミドルショットを決め、22点差（このゲーム最大の差）となったところで、富士通がタイムアウト。

ここで山本に代わって5番曾我部が出て、吉田にマッチアップする。タイトに付きプレッシャーを掛け簡単にドリブルで運ばせない。よく付いているが、欲を言えばパスに対してトレースしたい。中々点差が縮まらない中、JXは吉田に代わって藤岡が出場する。藤岡のガード力は221号で触れたように今後を期待させるものがある。ここでも、瞬時の判断によるパスカ、ディフェンスのプレッシャーにもボールを失くさないキープ力が光る。富士通は、篠崎、町田のドライブインや3Pで意地を見せるが、渡嘉敷、宮澤のポストプレイが決まり点差を詰めることが出来ない。最後は藤岡がブザービートドライブショットを沈め、3Qを終わって66対45でJXがリード。

最終Qに入る。JXは藤岡、宮崎が入る。JXは2人に経験を積ませたいという意図が見える。特にガードポジションは、ビジョンや判断力を強く求められる。20点以上差がついてしまった富士通としては、相手ガードにプレスを掛けることが想定されるのであるから。

宮澤のジャンプショットを皮切りに、渡嘉敷が4連続でゴール下やミドルショットを決める。富士通は、早目早目にショットを試みる。町田の3P、長岡のミドル、篠崎のドライブ&ゴール下の連続ショット、1番三谷の3Pで追いかけるが、中々差が縮まらない。曾我部や町田が必死にボールマンにプレッシャーを掛けるが、藤岡、宮崎にうまく運ばれてしまう。4Qは、JX25対富士通22と意地を見せたが及ばず、結局最終スコア、91対67でJXが優勝し4連覇を果たす。

決勝戦を観戦して、気が付いたことを分析してみます。3つです。

1番目は、スクリーンのディフェンスです。両チーム共、『スイッチ』で対応していました。なぜスイッチなのかと言うと、ズバリ対応が簡単だからです。ショウハードやショウフラットは十分練習を重ねないと実戦で使いこなすことはできません。要するにファイトオーバーするタイミングやスクリーナーのディフェンスからの受け渡し（ユーザーのディフェンスと交換するタイミング）が難しいのです。また大型チームの場合、スイッチしてもミスマッチが起きないからです。現在U-18のカテゴリーでは、ショウハード（トラップも含めて）やショウフラットの、所謂ファイトオーバーするディフェンスを薦めています。どちらが良いと断定することはできませんが、ミニバスの頃から徹底すれば、ファイトオーバーを軸にしたディフェンスがよいと思います。なぜならやはりミスマッチが起り易いからです。いずれにしても、ミニバスのカテゴリーの段階から取り組みたいスキルではあります。